

アトリエ 琉游舎 だより 127号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2022年3月23日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

春霞 立つを見捨ててゆく雁は
花なき里に 住みやならへる

- 冬の間は氷の張っていない所で夜を過ごしていたコリーナ蓮池の雁たちは、水が温み氷もすっかり融けた今は、悠々と池全体を使って寛いでいます。そろそろ北帰行でしょうか。
- 雑草の新芽か地中の虫を啄んでいるのか、池の土手に上がって地面をつついて雁の家族もいます。私が池の淵を通るとガァーガァーと鳴きながら慌てて池に舞い降りていきます。
- 雁にとっては長い旅の前の安らぎのひと時なのでしょう。南から渡ってくる鳥たちと入れ替わりに、春の花を眺める間もなく、北に向かって飛び立ちます。「春霞 立つを見捨ててゆく雁は 花なき里に 住みやならへる（古今和歌集：伊勢）」春霞が立ちこめるよい季節となったのに、それを見捨てて北に帰る雁は、花のないところに住みなれているのだろうか。
- 平安時代の女人は春の花に見向きもせず北へと帰っていく雁たちに自分の恋情を重ね合わせて見ていたようです。花の盛り（私）を見捨てて去ってってしまう雁（恋人）。鴨の習性である北帰行にもつれなく立ち去る恋の相手を重ね合わせる情感は、今は昔かもしれません。
- 徳川家康の鷹狩り好きは有名です。鷹などの鳥を訓練調教して雁や野兎等の獲物を捕らえさせるという狩猟方法で、武家は軍事訓練と娯楽と貴重なたんぱく源の補給を兼ねて、鷹狩りを盛んに楽しんでいました。雁たちは哀れなことに、人間に狩られる鳥たちだったのです。
- 雁は保護鳥なので私が蓮池の雁を狩猟することはできません。それでも人間に襲われて食べられた記憶はDNAに刻み込まれているので、私の姿に気づくと慌てて飛び立っていくのです。
- 人对雁の関係は雁側の人への恐れですが、民族間の場合は恐れと恨みの感情がDNAに刻み込まれてしまったら、侵攻と復讐の無限連鎖に陥ってしまいます。そこからの脱出が春霞のたつを見捨てて行く雁に倣うしか術がないとしたら、人は何と不幸な生き物なのでしょう。

木 金 土 日

3・4月スケジュール

| 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|-------------------|----|-------------------|------|----|---------------------|
| | | | 24 映画会 13時半 | 25 | 26 | 27 |
| 28 | 29 | 30 | 31 映画会 13時半 | 4月1日 | 2 | 3 写経会 13時半 |
| 4 | 5 | 6 | 7 映画会 お休み | 8 | 9 | 10 |
| 11 | 12 読書会 13時半 | 13 | 14 映画会 13時半 | 15 | 16 | 17 |
| 18 | 19 | 20 | 21 映画会 13時半 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 読書会 13時半 | 27 | 28 映画会 13時半 | 29 | 30 | 5月1日 写経会 13時半 |

写経会
4月3日(日)
5月1日(日)
13時半

読書会
4月12日(火)
4月26日(火)
13時半

4月7日(木)
映画会
お休みします

寒い時期に戸外から戻って冷えた体そのまま風呂に入った瞬間「あ～、極楽、極楽」という言葉が自然と出てきてしまうことがあります。寒さで身も心も凍えていたものが、暖かな湯に浸かることでたちまちに疲れが癒やされます。大仰に言えば、寒さの苦痛から解放された瞬間がその時の私の「極楽」だったのでしょ。 「お前は極楽とんぼだね」といわれて褒められたと思う人はいないはず。極楽とんぼとは、俗世間の心配事もなくお気楽に暮している境遇の人のことで、暢気に暮している人を揶揄して言う言葉だからです。自ら韜晦して演じることはできても、芯から極楽とんぼになりきって生活することは理想ではあって現実には難しそうです。ところで喩えに使われた「とんぼ」は果たして極楽の境遇にあるのでしょうか。一見上空で優雅に気ままに暮しているようですが、同じく空を飛ぶ鳥に目を付けられれば地獄に早変わりしてしまうでしょう。

念仏者の聖典とも言うべき浄土三部経のひとつに「阿弥陀経」注1があります。この経は極楽浄土の姿を克明に描写しています。極楽浄土とよく一括りにされますが、浄土は悟りを開いた仏が住む清浄な国土を略して浄土と言ひ、阿弥陀仏の住む浄土を極楽浄土と言ひます。つまり極楽は念仏者が往生を願う場所として措定された場所です。因みに私たち法華経の徒はお釈迦様が法華経を説いた地「靈鷲山」注2が浄土です。ここはお釈迦様が常に実在して法を説く場所で靈山浄土と言われま。念仏の徒は西方の阿弥陀仏が住む極楽浄土に往生成仏を願ひ、法華の徒は私たちの住む娑婆に実在する靈山を娑婆即寂光土（浄土）と信じ即身成仏を願ひました。

靈山浄土は私が常日頃書いている「安らぎのところ」のことです。つまり日々の私たちの生活の中にあることです。そして安らぎのところは日々の行いによってだけたどり着けるところなのです。私は死後の浄土について、今は全く考えも及びません。日々の行いだけが安らぎのところ（浄土）と信じているからです。極楽浄土についても私は全く信じる事ができないのです。それは極楽浄土の否定ではなく、今はまだそこまで考える必要がないほどに、日々の行いに安らぎのところを見いだすこと（娑婆即寂光土）ができているからです。とは言っても私もいずれこの娑婆を離れるときが来ます。その時、仏教徒として古来日本人は浄土をどのように希求してきたかを知っていても無駄なことではないと考え、今年一月から読書会で「阿弥陀経」を読むことにしました。平安貴族が願ひ、法然や親鸞が念仏によって往生できると説いた極楽浄土は、阿弥陀経の中で具体的な映像イメージとなって描かれていました。一言で言えばこの経は大変面白い！そして寺の荘厳がこの経を下敷きにして具体化されていることがよく分かります。とても短い経で理屈っぽくもないのですが、後世の人がいろいろな解釈をしてしまうから小難しくみえてしまうのです。解釈するのではなく書いてあるとおりにありのままに受け取り(受持) 分からないところはそのままにする、これが経を読むときの基本的な姿勢です。

「これより西方、十万億土の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽という。その土に仏ありて、阿弥陀と号す。今、現に在まして説法したもう。（中略）その国の衆生、もろもろの苦しみあることなく、ただもろもろのたのしみのみ受く。ゆえに極楽と名づく。」阿弥陀経の中に示された「極楽」の定義です。「無有衆苦 但受諸楽 故名極楽」、極楽は「苦」の一切ない「楽」だけのある場所、楽を極めた場所が極楽です。何とシンプルで分かり易い定義でしょうか。このあと具体的な極楽の様相と住人が描かれ、「一心に念仏を唱えれば死の直前に阿弥陀仏がお迎え(来迎)に来て、死とともに極楽浄土へ連れて行ってくれる（往生）」と説きます。この阿弥陀仏の来迎と往生を信じることで初めて極楽が私たちのものとなります。これが阿弥陀経に書かれているありのままの極楽です。ここには解釈も何かを付け加える必要もありません。ただこれを信じた者が受け入れればよいのです。これが経を受持すること。私は経をこの様に受け取ります。次に受持（信）したらどう行かうか（行）、これが信行ということです。経は信行の道標、その標の先にあるものは安らぎのところです。阿弥陀経を受持し一心に念仏を唱える（行）ことで極楽への道を歩むこと、これが念仏の徒の信行一致です。

極楽の境地は、富と権力を極めた境地でないことは言うまでもありません。それは極楽を願う浄土信仰が富と権力の頂点にある平安貴族から始まっている事実をみれば充分でしょう。物質欲権力欲名誉欲を満たしてもまだ、人は生ある限り苦しみからも逃れられない存在なのです。であるならば、念仏をただ一心に唱え一刻も早く阿弥陀仏の来迎を願えば良いはず。しかし人は死ではなく生きることを望みます。歎異抄に「念仏申し候えども、踊躍歡喜の心おろそかに候こと、また急ぎ浄土へ参りたき心の候わぬは、いかに候べきことにて候やらんと申し候いしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房、同じ心にてありけり、云々」とあります。「弟子が、念仏を唱えても喜ぶ気持ちも早く極楽浄土に行きたいという気持ちも起きない、と問うと、私（親鸞）もお前と同じ気持ちなのだ。そのことをずっと疑問に思っていたのだ」と答えています。ここに人が浄土を求める気持ちのありのままがあります。つまり生きていくために浄土を希求するということです。念仏宗は阿弥陀仏を念じて極楽浄土を心に現出させることで日々を生き抜く心の糧にし、法華の徒である私は、日々の行いが安らぎのところへ（靈山浄土）と辿る道だと信じて毎日を送る、これは全く同じ願いなのです。それぞれの浄土を願ひ日々の生活の中に現出させることがお釈迦様の弟子たちのそれぞれの浄土なのです。他人の浄土を奪うことで自分の浄土を拡張するという思想は、人の浄土を地獄にし自分だけの浄土（地獄）をさらに拡張することになってしまうでしょう。今西方で起きてきているこの事態は、各各に 琉游舎：戸井 出琉・恭子 各各の浄土があるという視点の欠如が原因です。温かな風呂が極楽であろう お問い合わせ：0287-53-7848 08033508152 と、私が極楽とんぼであろうと、それも私の日々の浄土なのです。 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850